

## 多彩な諺を“実演”つきで研究発表

前回の「迷信」に続いて今回は「諺」です。スペインは諺のとても豊かな国です。諺をこよなく愛し、諺は教養の一つである、とさえ思われることがあります。小説『ドン・キホーテ』に登場する主人公とサンチョ・パンサのしゃべり言葉の中にも、庶民の実感に根ざした諺、あるいはそれに類した創造語が頻繁に出ています。

7月、会話のクラスの日。担当となったエストニア出身で頭の禿げたりストは、スペインの諺について研究発表しました。“実演”も交えたそれが大変に面白かったのでその一部を再現してみます。

黒板前の教師用の机に座ると、彼は鞆の中からおもむろに小さな辞典のような本を取り出しました。「諺の辞典です」。続いて再び鞆を開けると、中くらいの大きさの本を取り出しました。「諺の辞典です。11,000の諺が載っています」。「小」から「中」へ。そのしぐさに教室は大笑い。彼がもう一度、鞆を開くと、今度は日本の百科事典を倍の厚さにしたような本が出てきました。「これも諺の辞典です。60,000の諺が載っています」。教室は爆笑と拍手。それほど諺関係の本もある、ということなのでしょう。

かくして彼は、30あまりの諺を順序だて読み上げていきました。(諺には、語頭または語尾が韻を踏む面白さのものがありますが、残念ながら日本語訳ではその面白さは表現できません。代表例の拙訳は、なるべく日本の諺のようにやってみました)。

「安物は高価につく」(安物買いの銭失い)

「腐ったりんごは隣まで腐らせる」

「最期の旅にはトランクは要らない」

「うんと食べる者はうんと糞する」

…。

今度は、また鞆から何かを取り出しました。なんと、それは一本のワインとグラス。ボトルを開け、グラスに注ぎ、一口飲むとおもむろに次の諺を読み上げたのです。(皆は野次馬根性でその展開を見ています。担当教師のローラも、笑いながら黙認しています)



「やぶ蚊が蛙に言った『水の中で生きているよりも、ワインの中で死んだ方がいい』」

「水は魚に、ワインは人間に」

「ワインについて語るものは喉が渇く」

(こう言いながら、またワインを1杯)

「ワインは、飲めば飲むほど、喉はますます渇く」

(こう言いながら、更にもう1杯)



スペインはワインの国です。ぶどうの栽培面積は世界一、生産量ではフランス、イタリアに次いで世界第3位。それだけに、ワインについての諺も多いでしょう。

この辺から、また真面目な諺に戻ってきました。これにはスペイン語の原文もつけ、拙訳と同類の日本語の諺とも対比してみましょう。

## フェリアでのワインの試飲

No vendda la piel del oso antes de cazarlo.

「熊を捕りおさえる前に熊の皮を売りに出さな」(捕らぬ狸の皮算用)

En boca cerrada, no entran moscas.

「閉じた口にはハエは飛び込まない」(口は禍のもと)

Nunca llueve a gusto de todos.

「雨は決してみんなに都合の良いようには降ってくれない」(あちらを立てればこちらが立たず)

かくして、研究発表の締めくくりとして彼は言いました。「昔からの諺は決してウソをつかない」(諺の中に真実あり)。

一諺は人間の生き方、機微についています。この項の締めくくりとして、私も次の諺を紹介しましょう。

Nunca es tarde para aprender.

「学ぶのに決して遅いということはない」

少し真面目すぎますかね？



清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家  
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。  
東京都・昭島市在住

<http://homepage2.nifty.com/donky/>